

Title	The Modern Temper of Fitzgerald's Women : Toward the Threshold of Self-Realization
Author(s)	橘, 幸子
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/49135">https://hdl.handle.net/11094/49135</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	橘 幸子 <small>たちばな さちこ</small>
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 21535 号
学位授与年月日	平成 19 年 9 月 26 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	The Modern Temper of Fitzgerald's Women: Toward the Threshold of Self-Realization (フィッツジェラルド作品における女性たちの現代的性質：自己実現に向かって)
論文審査委員	(主査) 教授 森岡 裕一 (副査) 教授 玉井 暲 准教授 服部 典之 准教授 片渕 悦久

### 論文内容の要旨

本論文は、序論、7章からなる本論、および結論で構成された英文 166 頁、400 字詰め原稿用紙換算で約 450 枚に相当する論文である。本論文は、現代女性に対して否定的だと見なされることが多いフィッツジェラルドの作品における男女の関係性や女性像を読み直し、女性たちの現代的な性質に対する作者の肯定的な見解を明らかにしたものである。作品中の男性がいかに関性に影響力を行使し、支配しているかを分析した後、その家父長的な抑圧からの解放と自律性を求める女性について、特にセクシュアリティに関する表現に焦点を当てながら考察し、作者は、性的自立を基盤として自己を啓発し、主体性や自律性を獲得しようとする女性を描いているという見地から論を展開していく。

第一章では、「リッツ・ホテルほどもある超特大のダイヤモンド」を取り上げ、従来の批評では「無垢な」少女とされてきた主人公について、彼女がそう見えているのは、前時代のヴィクトリア朝的道德観によって彼女を抑制しようとする父親と、彼女を理想化する主人公の影響によるものだという点を明らかにし、男性によってテキストの表面上では不明瞭にされている彼女の性的自発性について論じる。第二章では戯曲『植物—大統領から郵便配達人へ—』において、自己決定性を失った若いフラッパーに対する作者の批判が表されていること、また、主人公の 30 歳の妻が最終的に現代女性としてのふるまい、とりわけ性的欲望を取り戻すことに注目し、後期長編小説では既婚女性の性が扱われるようになることを指摘しながら、この戯曲をフィッツジェラルド作品の転換点と位置づける。

第三章では『グレート・ギャツビー』を分析し、語り手によって意図的に曖昧化されているデイジーの女性性の表象について検証する。既婚者のデイジーが、主人公と関係を持つことで、結婚生活の中で麻痺させざるを得なくなっていた性的な感覚を取り戻し、夫の支配から解放され新たな自己を獲得することを望んでいたと解釈することで、これまで指摘されなかった、デイジーから次作のニコールへの連続性を明らかにする。第四章では『夜はやさし』を取り上げ、ニコールの父による近親相姦が、娘に対する父権的支配を強化するものであるということを指摘し、父権的な力を「父の言葉」がもつ影響力という面から検証する。近親相姦によって精神を病み、言語による自己表現が困難になったニコールがその影響力を克服して、最終的に、実の父親と、夫で担当医という立場から彼女の自我を自らの管理下で再構築しようとして代理父的な存在となったディックという二人の父との性的関係によって抑圧されてき

たセクシュアリティを回復し、ディックの管理を脱して自己実現を果たす様子について考察する。第五章では、初期の長編『美しく呪われし者』において、1920年代以前の社会に生きるグロリアが抱える葛藤を後期長編のヒロインたちと比較しながら論じる。時代に先んじた現代性を持ちつつ伝統的な女性教育の影響下にある彼女が、夫への貞節と経済的依存のため家父長的な結婚制度の枠組みから抜け出すことができず、結局自律性を失ってしまう過程を詳細に辿ることによって、この作品を、ジェンダー・イデオロギーが強力な時代の女性の悲劇として読み解くことを試みている。

第六章では長編との直接的な関連性が見られる最初の作品である「ジェイコブの梯子」を中心的に論じ、33歳の主人公が16歳の少女に寄せる愛情の背後には、無知な少女の自己確立を代理父のような立場でコントロールしようという支配願望が潜んでいること、また、彼が自身の支配力に危機を感じた際には、性的な関係に発展することによってそれを強化しようとしていることを指摘した上で、映画女優である彼女がその演技性を活用して巧みに代理父の支配願望を回避、拒絶していることを明らかにし、精神的・肉体的自律性を確保し続ける彼女をニコールにつながる原型だと結論づける。第七章では『夜はやさし』の出版を挟んで執筆された、父とその娘である少女が登場する「バビロン再訪」と「哀しみの孔雀」について分析する。父親側が言葉を媒介にして自らの影響力を行使しようとする様子やその言葉に秘められた近親相姦的な要素について、そして少女たちが父に管理されることを拒否して自律性を芽生えさせていることについて、両作品に共通する、父娘間の力関係を暗示する食事や食物のイメージを基に検証する。本論文では最終的に、未成熟や発達停止状態であることを賞賛していたフラッパーを描写することで1920年代初頭に流行作家となったフィッツジェラルドが、1930年代になって、大人の女性のように自律性を求め、自己実現へと繋がる可能性を秘めた少女たちを描くに至ったと結論づけている。

## 論文審査の結果の要旨

本論文の最大の貢献は、女性登場人物の性的側面に注目し、それが家父長主義的な束縛から女性たちが自立を目ざす動きであったととらえ、それを共感をもって描いたフィッツジェラルドという、これまでの大方のフィッツジェラルド観を逆転する読みを提示した点である。そのことを、とくに言語使用と食事場面における男性の女性支配という視点から、主要作品を分析する中で指摘する手腕はフィッツジェラルド研究に新鮮な切り口を与えるものと評価することができる。また、長編に隠れて従来あまり顧みられることのなかったいくつかの短編を、長編、とりわけ論者がフィッツジェラルド文学においてこの主題が完成を見たとする『夜はやさし』と関連づけて論じた点も本論文に説得力を与えているものと思われる。さらには、従来あまり論じられることのなかった、『偉大なギャッピー』のデージーと『夜はやさし』のニコールとの関連性に光を当てた点は注目に値する。

ただし、本論文に問題がないわけではなく、長編第一作への言及がほとんどなかったことや、主人公たちの倫理観への考察が欠けており、主張が単調になっている点は否めない。また、テキストの読みが強引と思われる部分もあり、反論の余地を残している点も惜まれる。しかし、これらの点は本論文の優れた価値を損なうものでは決してなく、よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。